

## 口ノ津港改修工事関係資料

今津, 健治  
神戸大学教養部

<https://doi.org/10.15017/13552>

---

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 1, pp.56-62, 1973-05-08. エネルギー史研究会  
バージョン：  
権利関係：



## 口ノ津港改修工事関係資料

今 津 健 治

長崎県島原半島の突端に存在する口ノ津港が石炭の輸出港として注目されるようになったのは、当時工部省の経営のもとに採掘されていた三池炭が三井物産の手によって、上海をはじめとする中国市場に輸出されるようになった明治九年（一八七六年）以降のことであろう。口ノ津港が石炭輸出港に指定され、長崎税関所管の取締所が設置されたのは明治十一年（一八七八年）五月であった（『長崎税関沿革史（統）』五頁）。また同月一日には三井物産も口ノ津出張所を設置した（『三井物産小史』一二四頁）。口ノ津港では栈橋の整備が進みそれまで舢舨を用いて本船に石炭を積込んでいたのが、同年十一月二十九日より直接本船に積込めるようになった（『工部省沿革報告』一〇九頁）。さらに航路の安全のために六等灯台が設置され点灯を開始したのは明治十三年（一八八〇年）五月十日である（同書二六八頁）。其の後口ノ津港を経由して石炭の輸出が次第に盛大に向う様は『三池鉱山年報』（三井鉱山株式会社蔵）あるいは『創業八十年史——三井船舶株式会社』、佐々木誠治著『日本海運業の近代化』等に詳しい。

次に掲げる資料は明治二十四年口ノ津港の浚渫を計画した村当局の長崎県知事宛の願書である。これには当時南高来郡長をしていた金井俊行の副申（資料一）が添えられている。これらの資料はいずれも九州大学九州文化史研究所蔵（元山文庫）のものである。同

文庫にはこの他にも当時の口ノ津港に関する資料として「肥前口之津港灣図」（明治二十年当時の同湾内の水深を詳細に示したもの）「長崎税関出張所記録」（明治二十年口ノ津税関取締所の記録）の二つがある。前者はとくに貴重な記録である。

この村当局から提出された計画がどのように処置されたか、あるいはそれが当を得たものであったか否かについては今後検討することにして、まず資料のみ紹介することにした。なお『明治工業史・土木篇』、広井勇著『日本築港史』等には口ノ津港構築に関する記録は全く見当たらない。また明治二十二以降の口ノ津港の石炭輸出入量、船舶入出港状況等は『大日本外国貿易年表』によって知ることができるが、当時の村当局の計画との差異も明らかにすることができるのであるが、これは次の機会に譲ることにしよう。

資料一 口之津港浚渫及入津料徴収願副申

郡下口ノ津村長伊東祐保ヨリ口之津港浚渫願及入津料徴収願村会ノ決議ヲ代表シ別紙ノ通差出候ニ付篤ト取調候処願面ヘ述フルカ如ク口之津港ハ天然ノ良港ニシテ從來船舶ノ出入少カラヌ殊ニ現今ハ特別輸出港ニ列セラレ常ニ内外ノ船舶輻湊シ重ニ石炭輸出入場所ト相成居候処海底次第ニ淤泥ヲ停滞シ年ヲ逐フテ埋堆候ニ付西洋形大

船ノ如キハ碇泊頗ル困難ヲ極メ多クハ港外ニ投錨シテ石炭ノ積移ヲ為スカ如キ有様ニ立至リ居申候就テハ之カ浚疏ヲ為スハ現今該港ニ取り尤必要ノ工事ト相認申候然ル処工費実ニ設計書ノ通り殆ント式拾万円ノ巨額ニ達シ到底村力ノ耐ヘ得ヘキ所ニ無之候得者之カ償却ノ方法ヲ設ケ入港船舶ニ対シ入津料ヲ徴収スルハ事情不得已儀ト相認メ申候又之ヲ徴収スルモ該港將來ノ盛衰ニ対シ格別ノ影響ヲ及スヘキ程ノ差支ハ有之間敷ト相見込候間願意特ニ御許可相成候様致度此段副申候也

明治廿四年十一月十七日

南高来郡長 金井俊行 官印  
長崎県知事 中野健明 殿

資料二 船舶入津料取立願

一、西洋形汽帆船 登簿噸數ニ応シ入港之都度一噸ニ付 金壹錢

一、日本形船五十石積以上 載積石數ニ応シ入港之都度十石ニ付 金壹錢五厘

右者長崎県下肥前国南高来郡口之津港浚疏工事及砂防池築造市街地海岸修築工事之儀ニ付別紙之通リ出願仕候ニ就テハ該工事補充費トシテ来ル明治廿五年ヨリ向フ四十四年マテ滿二十ヶ年間ニ当港ニ出入スル船舶ニ対シ前記之通リ入津料ヲ取立候様仕度奉存候条御差支ノ筋モ無之候半者御許可被仰付候様御執奏被成下度別紙相添当村会之議決ヲ代表シ此段奉願候也

明治廿四年十一月

長崎県南高来郡口之津村長 伊東祐保  
長崎県知事 中野健明 殿

資料三 口之津港出入船舶噸石數及ヒ入津料概調(年額)  
一、西洋形汽帆船 貳百艘 (廿一年ヨリ廿三年マテ三ヶ年間平均數 以下之ニ做フ)

此噸數 三十六万噸

此入津料 三千六百元 但壹噸ニ付金壹錢宛

一、同上帆船 四拾艘

此噸數 貳万五千噸

此入津料 貳百五十円 但同上

一、日本形船五十石積以上 壹万艘

此石數 二百万石

此入津料 四千五百円 但十石ニ付金壹錢五厘宛

入津料金惣計八千三百五十円

資料四 口之津港浚疏願

長崎県下肥前国南高来郡口之津港之儀ハ四山圍繞港内広闊又夕積水深淵ニシテ古来船舶碇繫ニ適シ天然之良港ニ有之候処北涯ニ河流アリテ常ニ土砂ヲ流瀉シ港心ヲ埋没スルニ因リ曾テ砂防ノ為メ住々數ヶ所之新地ヲ築設シタリシガ全ク湾内之幅員ヲ狭少ニシ随テ潮流ヲ阻隔シ淤泥ヲ停滞セシムルノ原因ト相成リ今更遺憾之至リニ堪エズ目下小船日本形ノ如キハ敢テ支障ヲ感スルコトナキモ西洋形大船ニ至テハ因却甚タ少カラズ若シ此儘ニ放棄シ去ラハ恐ク數年ヲ出ズシテ防クベカラサルノ域ニ陥ラント頻リニ浚疏ノ企ヲ為スコト茲ニ年アリト雖モ時機未タ至ラズ徒ラニ塵介等ノ取締ヲ嚴ニシ荏苒罷在候央曩キニ特別輸出九港ノ一ニ加ヘラレ出入船舶ハ益々頻繁ニ趣ク

ノ折柄何分其儘ニ難差置然ルニ過ル廿一年中三池礦山局ニ於テ之レカ浚掘ヲ試ミラレシニ其坪數僅カニ五千ニ内外シテ大ニ其功ヲ曉ルコトヲ得タリ爰ニ於テ之レカ繼續ヲ乞望シ居リシニ俄然該局ノ引払トナリ遺憾措ク能ハズ爾來何卒法ヲ設ケ之レニ倣ハント欲スレトモ一時ニ舉行センニハ村力薄弱其計画ト負担トニ堪ヘズ候ニ付當春來本県技師吉村長策氏之測量図并工事設計書ニ基キ來ル明治廿五年ヨリ向二十ヶ年間浚疏工事ヲ繼續シ且ツ北涯ノ河流ニ砂防池ヲ築造シ市街地海岸ヲ修築シテ泥砂ノ灣内ニ注射スルヲ除クハ目下緊急之事業ト奉存候丈モ砂防池并海岸修築工事ハ浚疏工ニ相伴ヒ当初五ヶ年間ニ浚工スルノ目的ニ候条御差支之筋モ無之候半者御許可被仰付候様御執奏被成下度別紙側量図面并工事設計書類添属本村会之議決ヲ代表シ此段奉願候也

明治廿四年十一月

長崎県南高來郡口之津村長 伊東祐保

長崎県知事 中野健明 殿

### 資料五 南高來郡口ノ津港浚疏工事設計書

南高來郡口ノ津港ハ往古港灣ノ区域広闊ニシテ天然ノ良港ナリシハ疑フ可ラスト雖トモ近世數ヶ所ノ新田ヲ築キタル為メ港灣ノ水面其過半ヲ失ヒ現今ニ至リテハ風波ノ際船舶ノ碇繫ニ適スル部分ハ字戒鼻以内ニシテ巾式百七拾間長六百間ノ滿潮面積ヲ有スルノミ其部分ト雖トモ沿岸新田其他該港ニ注入スル諸水路ヨリ放流スル土砂堆積シテ過半ハ海底露出シ又ハ露出セサルモ水深僅カニ數尺ニ過キス因テ該港ニ來舶スル運炭汽船ノ小ナルモノト雖トモ投錨シ得ル区域ハ夷ニ巾式百間長サ三百間即六万坪ノ狹小ナル局部ニ止マレリ然ル

ニ現今該港ニ於テ三池産石炭ヲ塔載スル汽船ノ大ナルモノハ載積三千噸以上ニシテ二十四尺ノ吃水深ヲ有ス此大船ヲシテ運用自由ナラシムルニハ少ナクトモ三十尺以上ノ水深ヲ要シ幅員式百間ハ僅カ一艘ニ對シ決シテ廣シト云ヒ難シ此ノ如ク港内ノ水面既ニ狹少ナル以上ハ之ヲ改修シ完全ナル港灣トナスコト決シテ容易ノ工事ニ非ルナリ然リト雖モ現在ノ水面ハ載積千噸以下即吃水深十八尺以下ノ汽船碇泊ニ差聞ハサルヲ以テ全ク望ナキ港灣ニアラサルハ勿論ナリ若シ一小港灣トシテ將來ニ維持セントセハ沿岸ヨリ土砂ノ流入ヲ防キ即貝瀬川ノ上流(図面ニ示ス位置)ニ砂防池ヲ築キ新開地并ニ川筋堤防ノ修繕ヲ怠ラス常ニ堅牢ナラシメ市街地海岸ヲ修築シ而テ図中紅色紫色青色線内ヲ汽船投錨地ト黄色線内ヲ運炭和船ノ通路濬筋トシテ浚深スルコト目下ノ急務ナル可シ其工費ヲ概算スルニ左記ノ如シ

### 一、投錨地并ニ濬筋浚疏工

紫線内面積三万六千三百七拾五坪

干潮以下三十尺 平均浚深壹間式合壹勺七方

土坪四万四千貳百六拾八坪四合

青線内面積壹万八百坪

干潮以下二十七尺 平均浚深壹間式合四勺七方

土坪貳万四千貳百六十七坪六合

紅線内面積四万六千八百坪

干潮以下二十四尺 平均浚深壹間三合九勺三方

土坪六万五千九拾貳坪四合

黄線内面積九千三百四拾貳坪

干潮以下六尺 平均浚深壹間三合六勺七方

土坪七百五拾坪

惣土坪拾三万四千四百七拾八坪四合

工費 金拾六万千三百七拾四円八錢 壹坪ニ付壹円貳十錢  
計金拾六万千三百七拾四円八錢

二、市街地海岸修築工

埋築面積七千六百五坪六合 埋高平均貳間五合  
立坪壹万九千拾四坪壹合五勺

内 訳

下層埋築壹万五千貳百拾壹坪三合貳勺

工費 浚疏土砂ヲ以テ埋築スルニ付無代価

上層埋築三千八百貳坪八合三勺 深三尺新土埋築

工費 金五千七百四円廿四錢五厘 壹坪ニ付壹円五拾錢

海岸石垣長六百四拾九間 平均高貳間八合

平坪千八百拾七坪貳合

工費 金五千四百五拾壹円六拾錢 平壹坪ニ付金三元

計金壹万千五百五拾四圓八拾四錢五厘

三、砂防池築造工

池面積七百五十五坪貳合五勺 掘鑿深貳間

立坪千五百拾坪五合

工費 金千百三拾貳円八拾七錢五厘 壹坪ニ付金七拾五錢

周圍石垣長六拾四間 平均高貳間五合 平均百六十坪

工費 金三百七拾五円 壹坪ニ付金貳円五拾錢

石堰長五間巾拾間 平均五十坪

工費 金四百円 壹坪ニ付金八円

計金千九百七円八拾七錢五厘

三口合計金拾七万四千四百三拾七円八拾錢

資料六 浚疏工事費積書

支 出

一、金拾九萬四千八百八拾六円六拾壹錢貳厘

但明治廿五年ヨリ同四拾四年ニ至ル滿貳拾ヶ年間執行ノ惣額

内 訳

金拾六萬千參百七拾四円八錢

浚渫惣土坪拾參萬四千四百七拾八坪四

壹坪ニ付金壹円貳拾錢

金壹萬千五百五拾五円八拾四錢五厘

市街地海岸修築費

金千九百七円八拾七錢五厘

砂防池築造費

金百八拾八円八拾壹錢貳厘

砂防池潰地買上代

金壹萬六千五百六拾円

事務取扱ニ係ル諸費

金參千円

雜費豫備

収 入

一、金拾九萬四千貳百八拾円參拾九錢貳厘

但年同期上

内 訳

金拾六萬七千円

船舶入津料

金九千六百八拾五円

市街地埋築宅地売却代

金壹萬七千五百九拾五円參拾九錢貳厘

村方出夫拾萬九千九百七拾壹人貳分

壹人ニ付金拾六錢

差引金九拾參円七拾八錢 過剩豫備

資料七 支出金略表

種目	積算			
	一ヶ月額	一ヶ年額	五ヶ年額	二十ヶ年額
浚 疏 工 費	六七二円三九錢二厘	八〇六八円七〇錢四厘	四万〇三四三円五二錢	一六万一三七四円〇八錢
市街地海岸修築工費	九〇・八六・〇	一〇九〇・三二・〇	五四五一・六〇・〇	〔朱書〕五四五一・六〇・〇
砂防池築造費	一二・九一・六六六	一五五・〇〇・〇	七七五・〇〇・〇	〔朱書〕 七五〇・〇〇・〇
同上潰地買上代	三・一四・七	三七・七六・二	一八八・八一・二	〔朱書〕 一八八・八一・二
事務員諸給	二六・〇〇・〇	三一二・〇〇・〇	一五六〇・〇〇・〇	六二四〇・〇〇・〇
事務所雜費	一九・〇〇・〇	二二八・〇〇・〇	一一四〇・〇〇・〇	四五六〇・〇〇・〇
入津料取立費	二四・〇〇・〇	二八八・〇〇・〇	一四四〇・〇〇・〇	五七六〇・〇〇・〇
小計	六九・〇〇・〇	八二八・〇〇・〇	四一四〇・〇〇・〇	一・六五六〇・〇〇・〇
雜支出金	二〇・五〇・〇	一五〇・〇〇・〇	七五〇・〇〇・〇	三〇〇〇・〇〇・〇
惣計金	八六〇・八一・六	一万〇三三九・七八・六	五・一六四八・九三・二	※一九・四一八六・六一・二

※外金六千八百參拾七円拾貳錢是ハ埋築砂防両工事ノ夫役賃金ニシテ村民ノ負担ニ付本欄ニ算入セシナリ

備考

一、浚疏工費ハ設計書ノ工費惣額ヲ掲ケタルモノナリ

一、市街地海岸修築工并砂防池築造工費ハ着手ヨリ五年ヲ期シ竣工スル目的ニ付五カ年額ノ欄ヲ表セシナリ  
但下段ノ朱書ハ惣計金額ヲ表スル為メナリ

一、潰地買上代砂池ニ充ツル土地或ハ山林ヲ合セ七百五十五坪二合五勺ヲ五年賦ヲ以テ買上ル平均代価ナリ

但一坪ニ付金貳拾五銭ノ積算ナリ

- 一、事務員諸給ハ事務長一人月給拾円事務係リ一人月給五円捨土取締一人月給五円小使二人月給各三円ノ積算ナリ
- 一、事務所雜費ハ家屋借料一ヶ月三円筆墨料三円消耗費三円旅費及電信郵便費九円通イ船一艘借料老円ノ積算ナリ
- 一、入津料取立費ハ取立役二人月給各五円舟子二人各三円通イ船二艘借料各老円雜費及夜勤手当月額六円
- 一、雜支出金ハ継続事業中取立金ト工賃金ト権衝セサル際ニ於テ支用スル為メ金貳千円ヲ他借立替ヲ為ス利息ニ充ツルモノトス

資料八 収入金略表

種目	積算	一ヶ月額	一ヶ年額	五ヶ年額	二十ヶ年額
汽船入港数		一六艘六六六	二〇〇艘	一〇〇〇艘	四〇〇〇艘
同載積噸数		三万噸	三六万噸	一八〇万噸	七二〇万噸
同入津料		三〇〇円	三六〇〇円	一八〇〇〇円	七二〇〇〇円
西洋形帆船入港数		三艘三三三	四〇艘	二〇〇艘	八〇〇艘
同載積噸数		二〇八三噸三三三	二万五〇〇〇噸	一二万五〇〇〇噸	五〇万噸
同入津料		二〇八三錢三厘三三三	二五〇〇円	一二五〇〇円	五〇〇〇円
日本形船舶入港数		八三艘三三三	一万艘	五万艘	二〇万艘
同積石数		二五万石	三〇〇万石	一五〇〇万石	六〇〇〇万石
同入津料		三七五円	四五〇〇円	二万二五〇〇円	九万円
小計噸数		三万二〇八三噸三三三	三八万五〇〇〇噸	一九二万五〇〇〇噸	七七〇万噸
石数		二五万石	三〇〇万石	一五〇〇万石	六〇〇〇万石
入津料		六九五円八三錢三厘三三三	八三五〇円	四万一七五〇円	一六万七〇〇〇円
浚疏夫役人数		二八〇人三分	三三六二人九分六	一万六八一四人八分	六万七二三九人二分
同賃金額		四四円八四錢八厘	五三八円〇七錢三厘六	二六九〇円三六錢八厘	一万〇七五八円二七錢二厘
砂防地夫役人数		七二二人二分	八五四六人四分	四万二七三二人	四万二七三二人
同賃金額		一一三円九五錢二厘	一三六七円四二錢四厘	六八三七円一二錢	(朱書) 六八三七円一二錢
小計夫役人数		九九二人五分	一万一九〇九人三六	五万九五四六八八分	六万七二三九人二分
賃金額		一五八円八〇錢	一九〇五円四九錢七厘六	九五二七円四八錢八厘	一万七五九五円三九錢二厘
埋築宅地売却代				九六八五円	
惣金計		八五四円六三錢三厘三三	一万〇二五五円四九錢七厘六	六万〇九六二円四八錢八厘	一九万四二八〇円三九錢二厘

備考

一、西洋形汽船ノ入港數ハ明治廿一年ヨリ廿三年マテ三ケ年間諸般ノ入港船ヲ概括シ平均數ヲ掲ケタルモノナリ

一、同載積噸數モ同上各船ノ噸數ヲ船數ニ割リ平均セシナリ

一、同入津料ハ一噸ニ付金壹錢宛ノ積算ナリ

一、日本形船舶入港數モ前掲ニ同シ尤モ五拾石積以上ニ限ル

一、同入津料ハ十石ニ付金壹錢五厘宛ノ積算ナリ

一、浚疏夫役ハ浚渫ノ泥土捨夫ニシテ惣土坪拾三万四千四百七拾八坪四合一日一人式坪掛リニテ表記ノ人夫ヲ要ス、此人夫ハ口之津村ノ負担トス

一、砂防池及市街地海岸埋築工事ニ係ル人夫モ口之津村ノ負担ニシテ当初ヨリ五年間ニ竣工スル目的ニ付表中特ニ五ケ年額ノ一欄ヲ設ケ浚疏工ト相伴フテ茲ニ砂防修築ノ両工事ハ完了スルコトヲ示シ自後六年目ヨリ向十五ケ年間ハ単ニ浚疏工ノミ残リシニヨリ最終ノ二十年額ノミヲ掲ケシナリ 但下段ノ欄ニ金額ヲ朱書セシハ惣計金額ヲ表スル為メナリ

一、埋築宅地売却代ハ市街海岸ニ新道ヲ開通シタル餘地三千八百七十四坪ノ沿道宅地ヲ得ル之レヲ壹坪式円五十錢ツ、ヲ以テ五カ年目即チ修築落成ノ期ニ売却スルノ代価ナリ

(おわり)

附記

資料六と資料七・資料八は重複する点もあるが、原資料の省略を避けた。ただ資料七・資料八は草稿と思われるものと清書と思われるものとそれぞれ二通あり筆者において一つの表にまとめた。またその際数字は見やすさを考慮して一二三というようにして、原資料にある百式拾三という表示はとらなかつた。なお原資料の数字で合計や立坪で計算に疑問の点も数か所見当るがそのままにした。資料五には設計図面(彩色)が添附されているが、これは省略した。

執筆者紹介(執筆順)

- 秀村 選三 九州大学教授(経済学部)
- 武野 要子 福岡大学教授(商学部)
- 松下 志朗 九州大学教授(経済学部)
- 東定 宜昌 九州大学大学院博士課程
- 長野 暹 佐賀大学教授(経済学部)
- 斎藤 俊彦 NIK資料センター勤務
- 今津 健治 神戸大学助教授(教養部)
- 田中 直樹 日本大学講師(生産工学部)
- 細川 章 多久市立図書館司書